

ちばけんやちよしりつにしたかつしょうがっこう
学校名 千葉県八千代市立西高津小学校 校長名 いけだ じゅんいち
池田 順一
所在地 〒276-0032 千葉県八千代市高津 8 3 2 - 3 8

TEL 047-450-7200
FAX 047-450-5491
E-mail fnisitaka@yachiyo.ed.jp
URL <http://www.yachiyo.ed.jp/enisitaka/>

1. 研究主題

「よりよい体育授業の創造」
—できる・わかる・かかわる体育をめざして—

2. 研究の期間

昭和55年度～平成22年度 31年間(継続)

3. 研究の目的

本校では、体育に関する研究を昭和55年から継続しており、「体育」を学校経営の中核に位置付け、体育学習を通して心身の健全な発達を促し、豊かな人間性を育てることを究極の目的として取り組んでいる。「学校経営を充実させるための体育指導」をテーマに8年間取り組んだ後、平成に入り、「一人ひとりが自発的、自主的に取り組む体育学習」をテーマとし、運動の系統性を明らかにした上で指導の在り方を究明することに取り組んでいる。

その流れの中で、学習指導要領の改訂により、明確化された体育の内容を具現化するためには、「できる・わかる・かかわる体育」が、今求められている体育であると考え、その実現に向けたよりよい体育授業を創造することをテーマとすることにした。

これまでは、体育科の全領域の研究を行ってきたが、本研究では器械運動とボール運動の領域に特化し、子どもたちにできる喜びを味わわせ、基礎・基本を身に付けさせるためには、どのような基礎感覚づくりの運動の指導が効果的であるかを明らかにすることを目的とした。

4. 研究の方法・実践内容

本研究では、子どもたちに「運動、学び方、態度の基礎・基本」を身に付けさせ、運動に親しむ資質や能力を育むためには、できる・わかる・かかわることが必要であるという仮説を立てた。

研究の方法は、教師全員が授業実践を行い、その中で、仮説の検証を行いながら、授業改善、教師の授業力、資質の向上を図るとともに、県内外に広く参加を呼びかけて公開研究会を実施し、効果的な指導を見出していく。それぞれが指摘された課題を修正しながら、より効果的な指導法を究明していく。

このスタイルは、本校が体育研究に着手してから一貫してとられてきたものであり、本年度で公開研究会は26回を数え、この成果は、個々の教師にフィードバックされている。

子どもたちが、「できる・わかる」ためには、何を指導すべきか、子どもたち一人一人に身に付けさせるべき最低限の学習内容や目標である「ミニマム」を学校が設定する必要があると考え、本校独自の「ミニマム」を設定した。

また、どこまでできるようにすればよいか、70%～80%の児童が達成すべき学習内容・目標である「スタンダード」を学校が設定すべきと考え、本校独自の「スタンダード」を設定し、指導方法と指導内容を明らかにした上で、体育の学力保証(技能保証)に取り組んだ。

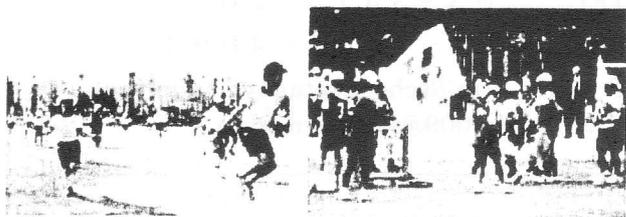
「かかわる」場面は、授業のみならず、業間体育や体育的行事にも想定した。本校では、体力向上推進委員会が中心となり、毎日業間体育に取り組んでいる。業間体育や、体育的行事を充実させながら、子ども同士、子どもと教師の人間関係に着目した。

平成20年度からは、千葉県から「体力づくり推進モデル校」として指定を受け、業間体育では、体づくり運動として、倒立、開脚、ブリッジと30秒全力走を取り入れ、計画的な体力づくりを実践している。また、外遊びを奨励し



朝の始業前や昼休みにも、全校児童が教職員とともに外遊びを行っている。

さらに、総合的な学習の時間とも関連づけて子どもたちの自主的運営によるスポーツフェスティバルにも取り組んでいる。



学校の環境では、広い校庭には、芝生を始め子どもたちが胸をわくわくさせるような体育施設や遊具が設置されており、遊びを通して平衡感覚や逆さ感覚、敏捷性など、巧緻性が身に付けられるようになっている。遊具は、教師の手作りによるものが多く、毎年教師による環境整備と安全点検が行われている。

また、保護者や地域の方々も協力的で、環境整備作業に多数参加していただいている。

5. 研究の成果

子どもたちに、体育の学力保証（技能保証）をするための指導方法を構築するには、本校児童の実態に応じた内容、到達点を設定した上で指導する方法が効果的であることが分かった。そのためには、学校独自の「ミニマム」、「スタンダード」の設定は意義のあるものであった。多くの子どもたちが、できる喜びを味わい、体育の楽しさを味わうことができた。

体育の授業を通しての「かかわり」は、「仲間とのかかわり」が効果的であった。器械運動やボール運動の授業で培われた「かかわり」は、子どもたちのよりよい人間関係の育成にもつながっている。

また、授業以外の「かかわり」は業間体育においても効果的であり、体力向上にも有効な手だてであった。仲間と運動や遊びを行うことで、運動を日常的に行うようになり、家庭で休日にも行うようになった。本校で低下傾向にあった瞬発力、持久力の二つの項目は、新体力テストの数値も向上している。そして、5段階評価のABCDE判定では、全校児童の93.7%がC以上となっている。千葉県が実施している5・6年生のAの生徒を対象とする「運動能力証」の交付率は、平成22年度は62.7%（県平均29.3%）であり県でも上位のレベルであった。このことから、「かかわり」を重視した指導は、授業にも体力向上にも効果的であると考える。

6. 研究の意義、発展性

(1) 各運動領域の系統性や発達段階に即した教材の与え方、各学年で身に付けたい動きについての資料をつくり、活用している。

また、これまでの授業研究で得た学習資料や開発教材も、学校全体の共有財産として有効活用されている。

毎年、職員が入れ替わったり、新規採用職員が入っても、これまでに作成した資料をもとに、充実した体育授業が行えるシステムが構築された。

(2) 業間体育や余暇時間の活用により、運動の日常化が図られ、子どもたちの体力の向上と、運動への親しみ、生涯体育への基礎基本の定着が図られている。

(3) 体育学習を通して、これからの子どもたちにとって重要な課題となる「コミュニケーション能力」の育成につながるよう、体育における「かかわる」ことを研究してきたことは、子どもたちの人間関係づくりに大きく役立っている。



(4) 本校の特色を生かした教育活動（体育を中核に位置付けた学校経営）を継続・展開することで、体育を通じた自ら考える力の育成、個性を生かす指導、人間関係づくりなど、学習指導要領の理念である「生きる力」の育成を図ることで、地域から信頼され、地域と共に歩む学校づくりに大きく役立っている。

(5) 本校の実践を、毎年全国公開研究会等で広く公開し、研究紀要にまとめることにより、体育授業の情報を発信し、より質の高い授業への提案・土台となっている。

また、全国各地から参観者を招いて、活発な協議会を行うことによって体育授業の情報を共有でき、本校の研究も深まり、さらに質の高い研究を目指すことができると考える。

